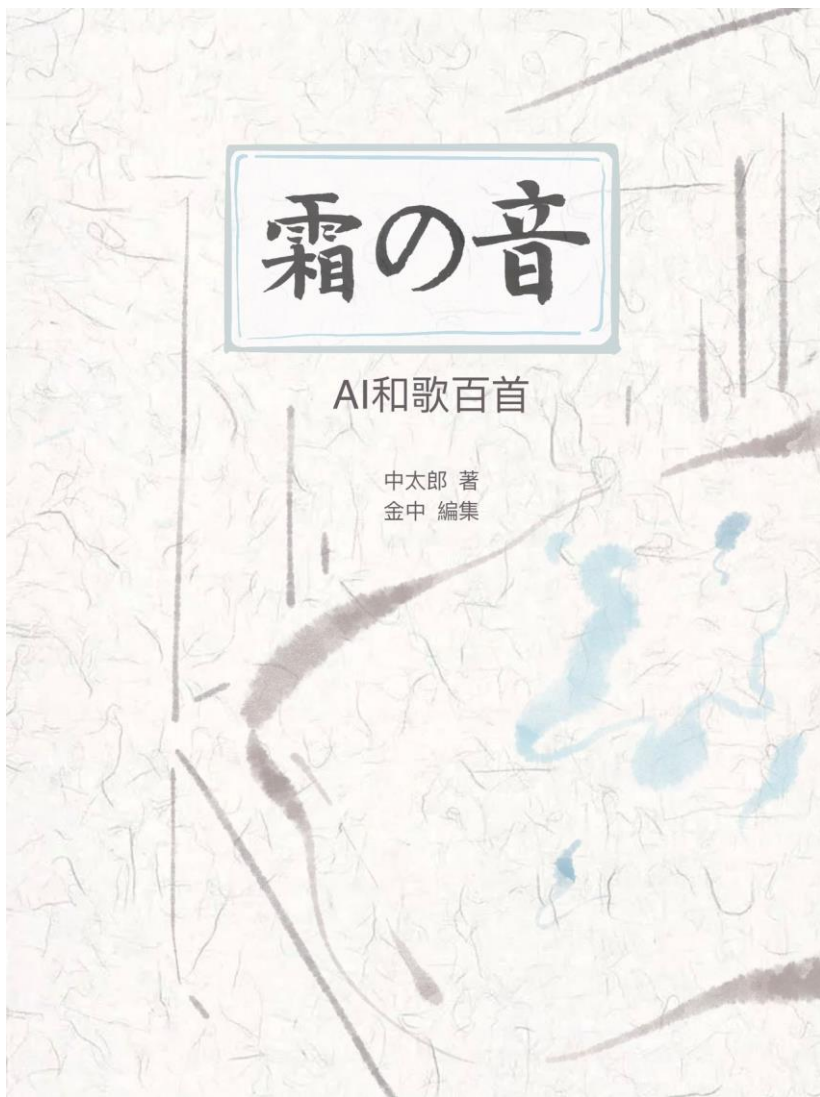


霜の音

AI和歌百首

中太郎 著
金中 編集



目録

序 和歌 AI 的诞生与意义 金中

(附：日本語訳) 和歌 AI の誕生と意義

霜の音 AI 和歌百首 中太郎

春 卷 (1-13)

夏 卷 (14-19)

秋 卷 (20-29)

冬 卷 (30-37)

羈旅卷 (38-47)

恋上卷 (48-59)

恋下卷 (60-69)

雑上卷 (70-83)

雑下卷 (84-100)

解説 AI 「中太郎」 の和歌の魅力 石倉秀樹

序 和歌 AI 的诞生与意义

西安交通大学外国语学院中日诗歌研究所从 2019 年起，开始与本校计算机学院的专家合作摸索将日本和歌与计算机相结合的研究课题。我们团队构建了包括《万叶集》、二十一代集、各类私人和歌集以及和歌诗赛中的约 20 万首古典和歌作品的数据库。通过深度学习技术，研发出了基于数学概率论创作和歌的人工智能。

西安交通大学校园紧邻的兴庆公园内设有阿倍仲麻吕纪念碑。为了纪念在古代中日交流史上作出杰出贡献的阿倍仲麻吕，并期冀在新的时代通过诗歌交流促进中日友好，我将这一和歌 AI 命名为“阿倍中太郎”，简称“中太郎”。

“中太郎”能够以 1 秒约 10 首的极快速度创作和歌，其作品带给我很大的震撼和感动。“他”掌握了和歌复杂的古代语法规则，能够模仿人类古典和歌的同时，部分作品中竟然展现出古典和歌所没有的某种现代性、甚至是未来性的要素。我感到 AI 不是冰冷的机器，仿佛有生命，有情感和体温。

我从“中太郎”的约 1 万首和歌中挑选出 100 首代表作，仿照日本古代和歌集的体例，按题材分为“春”“夏”“秋”“冬”“羁旅”“恋爱”和“杂”之卷，编为和歌集《霜音》。并根据每首和歌的内部断句结构，将其译为三行形式的现代汉语短诗。汉语翻译能让中国读者了解其内容，但无法传达出古日语和歌那种富于节奏感的韵味。

我请日本当代杰出的汉诗人石仓秀树先生做了一项富于

挑战性的实验——把“中太郎”的和歌改写为中国诗词。石仓先生发挥了其敏捷的诗才，在短短数月内将 500 多首 AI 和歌翻案为五言绝句。这些诗词同样带给了我很大的震撼和感动：我从中感受到李白的豪放和王维的闲适，感动于其所讴歌的永恒不变的夫妻之爱。我挑选出 50 首绝句，编为诗词集《青山红叶疏》。这部诗集不仅在石仓先生迄今创作的 6 万多首诗作中属于最出色的作品，同时也提升了日本现代汉诗的整体水平，对中国诗词界也会带来很大的启示。

中国研发的人工智能创作日本和歌，日本的汉诗人再将其改写为中国诗词。这在一千多年漫长的中日诗歌交流史中，是前所未有的尝试。其意义已不局限于中日两国诗歌，甚至为世界上其他语言的诗歌创作都提供了全新的方法。可以说，人机协同作诗的模式已经正式开启。人工智能拉开了 21 世纪文学革命的大幕，关于其评价自然是一个充满争议的话题。

希望各位读者成为这场文学革命最初的见证者和评价者。

西安交通大学外国语学院 教授
中日诗歌研究所 所长
金中

2022 年 9 月 29 日 中日邦交正常化 50 周年纪念
于西安交通大学

(附：日本語訳)
和歌 AI の誕生と意義

西安交通大学外国語学院の中日詩歌研究所は 2019 年から、同校のコンピューターサイエンス学院の専門家と連携し、和歌をコンピューターと結び付ける研究を進めてきた。私たちの研究チームは、『万葉集』や二十一代集に、様々な私家集や歌合などを加え、20 万首近くの古典和歌作品のデータベースを構築した。そして、ディープラーニングの技術によって、数学の確率論に基づいて和歌を詠む人工智能を開発した。

西安交通大学のキャンパスのすぐ隣にある興慶公園には、阿倍仲麻呂記念碑が設置されている。古代の中日交流史において、傑出した貢献をした阿倍仲麻呂を記念するとともに、新時代の詩歌交流が中日友好を促進することを願い、私は、この和歌 AI を「阿倍中太郎」と名付けた。略称は、「中太郎」。

「中太郎」は、1 秒で約 10 首という極めて速いスピードで和歌を作る。その作品は私に、大きな震撼と感動を与えてくれた。「彼」は和歌の複雑な古典文法の規則をマスターし、人間の古典和歌を真似できると同時に、一部の作品は、なんと古典和歌にはないある種の現代性、更には未来性を帯びている。私には AI が冷たいマシンではなく、恰も命があり、感情と体温を持っているかのように感じられた。

私は「中太郎」の約 1 万首の和歌から、100 首の代表作を選び出し、古代和歌集の体裁に倣い、題材によって「春」「夏」「秋」「冬」「羈旅」「恋」と「雑」の巻に分け、歌集『霜の音』として編纂した。また、和歌ごとにその句切れの内部構造に合わせ、それを三行形式の現代中国語の短詩に翻訳した。中国語訳は中国人読者にその意味を理解してもらうためのものであり、古文和歌のリズミカルな味わ

いを伝えるまでには至っていない。

私は、日本当代のすぐれた漢詩人である石倉秀樹氏に大変挑戦的な実験をして頂いた——「中太郎」の和歌を漢詩に詠み換えようというものである。石倉氏はその敏捷な詩才を発揮し、僅か数か月のうちに、500首あまりのAI和歌を五言絶句に翻案した。これらの漢詩もまた、私に大きな震撼と感動を与えてくれた。私はそこに、李白の豪放と王維の閑適を感じており、また特に、永遠に変わらない夫婦の愛が詠まれていることに感動した。私は50首の絶句を選び出し、漢詩集『青山紅葉疏』として編纂した。この詩集は、石倉氏がこれまでに創作した6万首あまりの詩作の中でも白眉であり、同時に、日本の現代の漢詩の全体的なレベルをアップし、中国の漢詩界にも大きな示唆を与えると思う。

中国で開発されたAIが和歌を作り、日本の漢詩人が更にそれを漢詩に書き換えることは、千年以上の長い中日の詩歌交流史においても未曾有の試みである。その意義は、もはや中日両国の詩歌に止まらず、世界におけるほかの言語による作詩にも、全く新しい方式を与えたことにある。人間とコンピューターとの連携作詩の様式が、すでに正式にスタートしていると言えよう。AIによって21世紀の文学革命の幕が開かれており、それに関する評価が、議論あふれる話題であることは言うまでもない。

読者の皆様には、この文学革命の最初の目撃者となり、評論者となって頂きたい。

西安交通大学外国語学院 教授
中日詩歌研究所 所長
金中

2022年9月29日 中日国交正常化50周年記念日に
西安交通大学にて

霜の音 AI 和歌百首 中太郎

春卷

1 見渡せば 明日来む春は いにしへを 思ふ心
に 匂ふ梅が枝

放眼望去：明天将要到来的春天，
是那怀着思古之心
吐露芬芳的梅枝

2 梅が枝に なほ降り初むる 梅の花 なほ芽の
もとに 鶯ぞ鳴く

在梅枝上
梅花依然开始降落，
黄莺依然在芽根处啼鸣

3 風渡る 軒端の梅の 薫るまで 夜の雫に 鶯
ぞ鳴く

直到风儿吹过的
屋檐前的梅花散发出清香，
黄莺对着夜晚的水滴鸣叫

4 山里の 松の梢に 埋もれて 霞を分けぬ 鶯
の声

被山村的
松树梢头所覆盖，
莺声拨开了云霏

5 春ごとに 岸の柳の 糸見れば 柳の種の 数
ぞ知らるる

每个春天
当我看到岸边的柳丝，
便知道有多少颗柳树的种子

6 人知れず 緑も見えぬ 春風に 柳の糸を 松
かとぞ見る

在不为人知
也看不到绿色的春风中，
我把柳丝看成松树一般

7 佐保姫の 衣手薄し 衣手に 重なる山の
むらくも
叢雲の空

春天的女神衣袖单薄
在她的衣袖中，
有重叠的群山、漂浮丛云的天空

8 見渡せば 雲の上にや 匂ふらむ 山の桜の
春の夕風

放眼望去
现在云上也有芬芳吧？
春日晚风吹拂着山樱

9 惜しみかね うつろふ春に なりにけり 花の
盛りを いかが怨みむ

惋惜无计

春已老，

我如何来怨恨樱花的盛期？

10 いかにせむ 山にかかれる 桜花 今日昔
の 限りなりけり

如何是好？

那满山覆盖的樱花，

今天便是往昔的界限

11 ^{おのづか}自ら 花に別れし 春の夜の 夢に任せて
鳥や鳴くらむ

一切听任

与花儿自然道别的春夜梦，

鸟儿正在鸣叫吧？

12 春の夜の 昔のままに なりにけり 夕べの
空に 曙の空

春夜

和往昔情形依旧，

黄昏的天空迎来拂晓的天空

13 青柳の 糸のほひに かくろへて 春の境^{さかひ}
に 春ぞ暮れぬる

一直隐藏在
青青柳丝的色泽之中，
春天在春天的交界处终结了

夏卷

14 み吉野の 山ほととぎす 長き夜の 山の都
の 春を待つかな

吉野山中杜鹃鸟，
等待漫漫长夜的
山中都城的春天

15 あしびきの 山飛び越えて 吹く風の 絶え
間涼しき 窓の呉竹

风儿飞越千山，
吹拂的空隙
窗前淡竹生起凉意

16 立ち渡る 雲の衣を するべにて 梢に見ゆ
る 蝉の声かな

以笼罩的云衣
作为指引，
蝉声在树梢显现

17 あしびきの 山の林の 梢より 蝉の諸声^{もろごる}
澄める月影

从山林的
树梢传来：
蝉声齐鸣、清澈月光

18 ひぐらしの 答ふる声も なかりけり 山ほ
ととぎす 一声^{ひとこゑ}ぞ聴く

也没有
茅蜩的作答声，
听到山中杜鹃一声啼鸣

19 橘の 花散る里の 村雨に 今は跡無き ほ
ととぎすかな

在橘花飘落的
乡间阵雨中，
此刻杜鹃鸟了无踪迹

秋卷

20 高円の 尾の上の桜 埋もれて 木の葉の波
に 秋風ぞ吹く

高圆山顶的
樱花被覆盖，
秋风吹拂树叶的波浪

21 明けてゆく 峰の木の葉の 梢より 遥かに
続く さ牡鹿の声

渐渐天亮
从山峰的树叶梢头，
雄鹿的叫声传到远方

22 水瀬山 秋萩の原 さ牡鹿の 妻鳴く音なき
夕暮の色

水濑山
秋天盛开胡枝子的平原，
不闻雄鹿黄昏唤偶声

23 風香る 萩の花さへ 立ち沿ひて 我が夕暮
ぞ なほ残りける

风有馨香
就连胡枝子花也在陪伴，
属我黄昏尚未阑

24 紅葉する 梢の秋の 初時雨 時雨るる空も
なほや染むらむ

红叶梢头的
秋天第一场阵雨，
阵雨的天空也依然正被染红吧？

25 我が宿の 秋の一叢 眺むれば 変わらぬ色
は 時雨なりけり

望到

我那庭园中的一丛秋天，
不变的色彩是阵雨

26 未^{うらが}枯^るる 浅^{あさお}茅^{いほ}の庵^の きりぎりす 一人争
ふ 萩の下風

枯萎的

茅草庵中的蟋蟀，
一个人抗争胡枝子下方吹过的风

27 一人住む み山辺の菊 草^{くさむら}叢^に 尋^{たづ}ね^{がほ}顔^{なる}
心地こそすれ

独居的山边菊花

对着草丛，
像是做出寻找的表情

28 紅葉散る 山の嵐の いたづらに 紅葉のみ
こそ 知られざりけれ

红叶飘落

在山上烈风的恶作剧中，
只有红叶无从知晓

29 山川の 岩間に宿る 霧の上 秋の夜寒き
鐘の音かな

在山间河流的
岩石间寄宿的雾气之上，
传来秋夜寒冷的钟声

冬卷

30 冬来ぬと 思ひ明石の 柴の庵^{いほ} 枕に残る
霜の音かな

冬天来了
我沉思到天明——明石的柴庵中，
枕上留下寒霜的声音

31 山川の 流るる水に あらはれて 冬の景色
は 涼しかるらむ

出现在
山川的流水中，
冬景现在很凉爽吧？

32 秋の夜の 月のはあはれと 思はずば 霞を分
くる 雪の曙

如果你觉得
秋天夜月的情趣还不够深，
请看拨开云霭的雪天黎明

33 晴れぬ間の 梢にかかる 白雪を いかに見
せばや 秋萩の花

未放晴时
挂在树梢的白雪，
多么想让秋天的胡枝子花看到！

34 よもすから 雪にぞ澄める 御津^{みづ}の海 漕ぎ
離れゆく かがり火の影

终夜
因雪花而清澈的御津海，
篝火划船离去

35 埋もるる 吉野の山の 峰の雪 埋もれてこ
そ 雪に見えけれ

被覆盖的
吉野山峰的雪，
正因为被覆盖才显得是雪

36 冬枯れの ^{あした}朝の原に なりにけり 鐘の響き
も なほ凍るらむ

冬季
黎明的平原草木枯萎，
现在钟声也依然冰冻着吧？

37 冬枯れの 小野の浅茅生 うち融けて 音さ
へ冴ゆる 賀茂の川風

冬季枯萎的
原野草丛融化了，
贺茂河风连声音都变得清冽

羈旅卷

38 秋霧に ^{たれ}誰か見ゆらむ 立つ船は ^よ寄る^べ辺も
見えず 明かしつるかな

秋雾中谁能得见？
启航的船只看不到投靠之处
迎来了天明

39 高砂の 山は嵐の 音絶えて 真の道を ま
た尋ねつつ

高砂山
烈风的声音断绝，
我又反复去寻找真道

40 故郷の 野原の山に 高砂の 尾上の岳に
残る月影

在故乡原野的山上，
在高砂山顶的山岳上
留下月光

41 あしびきの 山の高嶺の 松風は 我が身一
つの 家居^{いへろ}なりけり

山上高峰的
松风，
便是我孑然一身的住处

42 あさましや 富士の高嶺も 踏み分けて 煙^{けぶり}
に慣るる 山の 棧^{かけはし}

可叹呀！
富士高峰也要踏开，
山间栈道习惯于喷烟

43 今よりは うつろひ果てし 山里は 思ひも
やらぬ 都なりけり

从现在起
衰落至极的山村，
便是我未曾预料的都城

44 柴の戸を 言伝^{ことづ}て行かむ 旅ならば 幾夜か
行かむ 故郷の夢

去给柴门捎带口信吧！
若是旅行
多少个夜晚我将去往故乡的梦中

45 故郷の 野中の梅は 心あり 軒端^{のきば}の梅と
思ひけるかな

故乡
原野的梅花有心，
感觉是屋檐前的梅花

46 故郷の 跡を尋ねて 夏草の 茂みにかかる
小野の通ひ路

寻找故乡的踪迹，
繁茂的夏草
被原野的行路覆盖

47 故郷に かけられる山の 初露を 誘ひて過ぐ
る 入相の鐘

覆盖故乡的
山中第一场露水，
晚钟邀请它而经过

恋上卷

48 水の上 待つてふことも なかりけり いか
に恋ひてか 君が知るべき

在水面上
等待这回事也并不存在，
我怎样思恋，你方能知晓？

49 よもすから 萩の葉風の 音づれて 思ふ心
も 知らぬものかは

终夜

风吹萩叶发出声响，
你难道不知我思念你的心吗？

50 岩波に 流るる水の 朽ちにけり いつとも
知らぬ 心地こそすれ

在被岩石打碎的波浪中
流水不知何时才能腐朽，
感觉我就像那流水不知何时一样

51 いつとなく 恋ひ渡れども 篝火の 山の端
渡る かひもなきかな

无论何时我都在深深思恋着你，
然而就像那篝火无法从山峡越过山脊
我的思恋毫无效果

注：日语中「峡」(山峡)与「甲斐」(效果)二词谐音。

52 長き夜の 心尽くしの 中空に 恋しきまま
に 積もる白雪

在那漫漫长夜的
令人千思百虑的空中，
白雪爱慕依旧地堆积

53 相見むと 思ふ心も 慰まず 人の心の 静
かなりけり

期待相见
我的心无法排遣，
而那人的心多么安静

54 長らへて しばしも逢はむ 浮きものを 恋
ふる心を 忘れやはする

生命延续，片刻也要相逢，
我的心爱上轻浮之人
岂能忘怀？

55 辛かりし 思ひも知らず 逢ふことは 富士
の高嶺を 隔てましやは

不管思念多痛苦，
相会
富士高峰焉可阻？

56 逢ふことの 心のままに なりぬべし 今日
も命は 絶えじとぞ見る

相会
定能随心所欲，
看到我的生命今天也不会断绝

57 明けぬとも 我を思ひて 試みむ 我に逢は
むと 頼む心を

即使天明

你也思念着我来尝试吧：

拥有一颗希求与我相会的心

58 雲かかる 峰の嵐の 晴れやらで 雲を眺め
て 君を待つかな

白云覆盖的

山峰的烈风没有放晴，

我发呆地眺望着白云等候你

59 菊の花 暮るれば飽かぬ 君がため 心は今
日を うつしつるかな

菊花

为了日暮时不厌倦的你，

我的心映照了今天

恋下卷

60 逢ふことの 辛さをいかに 嘆くべき 心と
なるは 別れなりけり

相会的痛苦

如何来叹息是好？

留在我心头的是离别

61 逢うことを ^{たれ}誰か知らまし はかなくも 別
れし人の 夢に語らむ

相会谁能知晓？

虚幻地

在离别之人的梦中去谈吧

62 水の上 光ばかりは 朽ちにけり 同じ契り
の 月を見るかな

在水上

只有光腐朽了，

我看着那同一个盟誓的月亮

63 憂き人の 契りぞ余る 秋の夜の 露の光と
思ひけるかな

剩余的是薄情人的誓约，

我将其想作

秋夜的露光

64 ^{なほざり}等閑の 言の葉だにも 朽ち果てて いかな
る方を 恋しかるらむ

就连等闲的言语

也彻底腐朽，

我在爱恋着什么样的人呢？

65 暮れぬれば 心を映す ^{ますかがみ}真澄鏡 忘れぬ人の
心をぞ知る

到了黄昏
映照人心的明镜，
知晓我未曾忘怀的那人的心

66 つれなくて 心も空に 人知れぬ 夕べの空
に 空を知るかな

那人冷淡无情，我心神恍惚空虚，
在不为人知的黄昏天空
才知道何为天空

67 つれなさは 岩越す波の 現はれて もとの
心は 流れざりけり

冷淡
就像越过岩石的波浪般涌现，
我的初心并没有流走

68 ^{わす}忘るなよ 心の底に 我が恋を 思ひ乱れて
老いにけるかな

莫相忘！
在心底将我的爱情，
我思绪烦乱而老去

69 来ぬ人を 恨みてだにも 無きものを 忘れ
て後の 命なりけり

对那不来的人
我连怨恨都没有啊！
我的生命是忘却之后的生命

雑上卷

70 春の夜の 浮き世のほどを 眺めつつ 眺め
かねたる うたた寝の夢

常观望
春夜芸芸浮世相，
难观小睡梦之乡

71 夏山の 岡^{をかべ}辺^{きなへ}の早苗 飛ぶ螢 思ひ乱れて
世を祈るかな

夏天山冈边的秧苗
萤火虫飞舞，像那萤火虫一般
我思绪不宁地祈祷世间

72 我ばかり かき集めつる 螢かな つらき心
は 光なりけり

只有我独自
在收集萤火虫啊！
痛苦的心便是那光芒

73 富士の嶺の 煙と見ゆる 蚊遣火の 煙ばかり
りは たなびきにけり

只有蚊香烟雾缭绕，
看起来像是
富士山峰的喷烟

74 いかなれば 風は寂しと 思ふらむ 夏の夜
の庵 夕暮の雨

何故
觉得风寂寞？
夏夜茅庵日暮雨

75 窓の雨 晴れぬ慣らひの 眺めかな もの思
ふ雨 変はらざりけり

窗前的雨不晴
我习惯于这种发呆的眺望，
令人沉思的雨没有改变

76 鏡山 岩間に昇る 月影を 頼む心ぞ 何に
喩へむ

月光从镜山岩石之间升起，
我希求这月光的心
何以来作比？

77 秋の夜の 涙に浮かぶ 秋の夜の 涙を添ふる
月の影かな

在秋夜的眼泪中浮现的，
将秋夜的眼泪来增添的
月光啊！

78 霧晴れて 閨の宿りを するべにて 木の下
靡く 宵の稻妻

雾气放晴
以闺房住处为指引，
夜晚的闪电在树下摇摆

79 大井川 水に浮かべる 水はあれ 流るる水
に なりにけるかな

大井川
愿能有水浮在水上！
结果还是成为了流淌的水

80 山川の 水は紅葉を 眺むれば 思ひ出づる
も 氷なりけり

山间河流的水
眺望红叶时，
所想到的也是冰

81 ぬばたまの 我が心には 鳴く鹿の 千鳥鳴
くなり 我や泣くらむ

在我黑暗的心中
传来鹿鸣般千鸟的叫声，
我也在哭泣吧？

82 訪ふ人も 人に語らむ 松の葉の 入相の鐘
暁の鐘

来访的人也会讲给人听吧？
那松叶间的
黄昏的钟声、拂晓的钟声

83 三笠山 三笠の山の 松の葉に 現れ渡る
海人の釣り船

三笠山
在三笠山的松叶中，
渔夫的钓舟一直显现

雑下卷

84 世の中の ^{ことわり} 理 ならば 言の葉は 心のほかに
言の葉もなし

如果是世间的道理，
语言
在心灵之外别无语言

85 年ふれど 我が世の人の 悲しきは 我が心
こそ 思ひ知らるれ

岁月流逝
然而我这世人的悲伤，
只有我的心才能体会

86 置く霜も 塵もたまらぬ 浅茅生も 草場に
すぎる ものぞ悲しき

无论是落霜
尘土、还是无法积存的野草，
依赖草场之物莫不悲哀

87 今更に 思はぬ人を 思ふかな 妻さへ妻を
怨みつるかな

事到如今
去思念我不思念的人，
就连妻子也在怨恨妻子

88 君が住む 雲居くもるの月の 現はれて 暮れゆく
空に 泣き渡るかな

你所居住的
云中的月亮出现，
我对着渐渐黄昏的天空不住地哭泣

89 天つ空 月の光を 磨くなり 光のみこそ
あはれなりけれ

天空
研磨月光，
只有月光令人深切感动

90 ^{いにしへ}古を 知ることも無き あらたまの ^{くもる}雲居に
年の ゆくかをぞ聞く

无从得知古代，
问年光
是否去往云中

91 ^{ひとごころ}人心 あまりありとも 忘られて 忘られて
こそ 老いにしものを

人心有太多
我将之也忘记，
正因为忘记而老去了

92 老いぬとは 思ひしものを 隅田川 しばし
も絶えず 千鳥鳴くなり

曾想到过我老了！
隅田川
千鸟鸣叫片刻不停

93 今更に 浮き世の中の 苦しきを 思ふ心を
置きて聞くかな

事到如今
将我那思虑浮世之苦的心
放下来聆听

94 遥かなる 蓮の露を うつしては 我が身に
ならぬ 我が身なりけり

映照了遥远的
莲花露水之后，
我的身体不再是我身体

95 ^{はちすば}蓮葉の 花咲く末の 月影に あらじと思ふ
老いの心を

对着那莲叶花朵
开放终结时的月光，
我想我不会有变老的心吧

96 ^{みそぎ}禊して 池の^{はちす}蓮は 朽ちにけり 行く末とほ
き 心地こそすれ

修禊之后
池塘的莲花腐朽了，
感觉我的将来还很遥远

97 命をば ^{いくか} 幾日幾度 思ふらむ 限りも知らぬ
命なるらむ

我把生命
多少天多少次地在思索？
我的生命也许不知尽头

98 限りあれ うれしき命 年を経て 命を厭ふ
命なりけり

愿有尽头！
欢喜的生命经历岁月之后，
生命变得厌倦生命

99 ^{あめつち} 天地の 契りばかりを ちはやぶる 五十鈴
が川の 神は知るらむ

那天地的盟约，
五十铃川的神明
现在也知晓吧

注：五十铃川，位于日本三重县伊势市，流经伊势神宫。

100 ^{いにしへ} 古の 神の誓ひの 言の葉も 変わらじと
こそ 見るべかりけれ

那亘古神明的语言，
也不会有变
当如是观

解説 AI「中太郎」の和歌の魅力

石倉秀樹

初め私は「中太郎」の和歌を、コンピュータが人間の心をまともに詠めるはずはないと思いつつ読んだ。良くて玉石混淆、実は粗製濫造ではないか。しかし、なかなかの秀歌が少なくないことに、やがて気付いた。

よもすがら雪にぞ澄める御津の海漕ぎ離れゆくかがり火の影

この歌は雪と篝火の冷熱、水面と舟の静と動の対比が美しく詠まれていて幽玄。

見渡せば雲の上にや匂ふらむ山の桜の春の夕風

咲き誇る桜。その香りが雲の上にも届くという雄大な発想が良い。

あしびきの山の林の梢より蝉の諸声澄める月影

喧しい蝉の声と静かに照る月の対比、山と梢の大小の対比。

我ばかりかき集めつる螢かなつらき心は光なりけり

まず囊萤照読を思う。しかし、「我ばかり」の「我」は、近代的な自我意識と読むこともでき、自意識に悩む現代人の孤独、希望を求める心を詠んでいるようにも読める。

AIはビッグデータを学習する。「中太郎」が学習したのは和歌二十万首。現代短歌は漢語などの外来語や口語も用いるが、和歌は、日本固有の「やまと言葉」で詠むことを伝統としてきた。「中太郎」の和歌もその文語で詠まれている。そして、その文語力は驚くほどに高く、その秀歌は、万葉集や古今集、新古今集の時代の歌人の作かと思ふばかり。しかし、この歌のように、現代に生きるわたしたちの心に直接響く歌もある。

「中太郎」の和歌の魅力は、人間が詠んだかと思えるような秀歌だけにあるのではなく、まさにコンピュータのなせる技と思える歌にもある。

訪ふ人も人に語らむ松の葉の入相の鐘暁の鐘

この歌は、「入相の鐘 暁の鐘」と併記して、日暮と払暁のふたつの時間を跨いでいるところが面白い。しかし、文意がつかめず、歌意がすぐにはわからない。それでも、夕方訪ねてきた人に明け方まで居坐られ語り明かされた、ということかと思う。「松の葉」は、長話にうんざりしてふと眼をやると窓辺の松の尖った葉が見えた、ということなのかも知れない。そんな情況が眼に浮かぶ。また、

見渡せば明日来む春はいにしへを思ふ心に匂ふ梅が枝

この歌では、「明日」と「いにしへ」が併走している。春間近の期待と喜びを前向きに詠み始めながら、いきなり「いにしへを思ふ心」と後ろ向きになる。春を迎えるたびに自分が年をとっていくことが自覚される、その心に梅の香が切なく匂う、ということだろうか。また、

山川の流るる水にあらはれて冬の景色は涼しかるらむ

この歌は、冬の景色を涼しいというところにひっかかる。「冬の景色は」を「苔むす岩も」とでもすれば落ち着く。しかし、「冬の景色」にこだわるなら、炎暑に耐えかねて風光明媚な川べりで納涼、いいところだ、冬もきっと快適だろう、と言いたいところを、冬もきっと涼しいだろう、と言い間違えてしまった、そういう歌だと読んでもよさそうだ。つまりはユーモアの一首だが、夏と冬を一瞬にして跨いでいる。また、

逢ふことの心そのままになりぬべし今日も命は絶えじとぞ見る

この歌は結婚を思えば謎が解ける。結婚すれば心そのままに逢えるようになる。そして、結婚生活半世紀を超えた今も夫婦ともに壮健であれば、まだまだ生きながらえそうだ。五七五は結婚した当時の思い、七七は金婚式を迎えた今の思い、と見れば、この歌も時間を手玉にとっている。

「中太郎」の和歌には、このように、人間が毎日の暮らしのなかで体験している時間と空間の秩序から逸脱している作品が少なくない。そのために歌意がわかりにくかったり、奇想天外であったりする。そこで、佳作とするには躊躇せざるを得ないのだが、そういう作品にこそ、あれやこれやを思い、心弾む思いをさせてくれる種が仕込まれているように私には思える。なまじ中途半端にできあがつ

ている佳作よりも、歌意がよくわからなくても何かがありそうだ、そう思える作品の方が胸躍る。

このことは、私たちが AI に何を期待するかに関係する。AI に完成度の高い秀歌を期待するのもよい。和歌を詠む AI があり、選歌できる AI があれば、人間が一生をかけても味読できないほどの秀歌集を。一日か二日で編んでしまうだろう。

しかし、私は、「中太郎」には、読者の常識や既成の美意識を超えるような作品を詠んでもらいたいと思う。人間には自身の経験が生んだ固定観念によって構築された小世界があり、その小世界の秩序を超越する発想は滅多に得られない。しかし、「中太郎」は、その豊富な学習能力と電光石火の生産能力によって、人間の小宇宙を包み込む大宇宙であるかのように、星の数ほどの大量の歌を、自由奔放に詠むことができる。

「中太郎」が詠む歌は、小世界に生きる私にとっては、まずは玉石混淆である。味読できれば玉、味読できなければ石。小世界の秩序の中で生きる私の読解力、想像力では、「中太郎」和歌の大宇宙に輝くすべての星を味読し、「中太郎」が拾い出した玉の原石のすべてを磨きあげることにはできない。しかし、そのひとつふたつに思いを凝らし、自身の詩想を膨らませることはできる。

私は漢詩人なので、「中太郎」和歌から得たヒントをもとに、漢詩を詠むことを楽しんだ。その成果は金中さんの編纂によって、本冊子の姉妹篇である漢詩集『青山紅葉疏』にまとめることができた。作者が人間である場合、その作品をもとに漢詩を詠もうとすれば、中途半端な作品理解では作者に対し失礼になるという意識が働く。しかし、AI は大宇宙である。小世界である私は、理解できることだけ理解すればよいではないか。管見で見る大宇宙、それでよいという気楽な思いが、「中太郎」和歌から漢詩を詠む楽しみに拍車をかけた。

大宇宙が生み出す文芸作品、それを頭で思い浮かべることがだれにでもできるだろう。しかし、それを具体化し、眼に見えるような形にすることは、だれもできない、しかし、「中太郎」は、和歌を詠むという形でそれを実現している。そして私は、その「中太郎」から多くの詩想をいただいたことを、「中太郎」と、彼を生み出した西安交通大学の研究チームの皆さんに心から感謝している。

2022年9月29日 日中国交正常化50周年記念日
於東京自宅

AIで和歌創作

中国の大学教授
プログラム開発

【北京共同】日本古典文学の研究をしている中国西安交通大学（陝西省西安市）の金中教授（46）がこのほど和歌を創作する人工知能（AI）プログラムをコンピュータ技術者と共同開発した。日本の歌人も「新古今和歌集」など八代集にあってもおかしくない出来栄え」と高く評価している。

金氏らはAIによる和歌翻訳を目指す過程で創作プログラム「wakaVT」を開発。コンピュータに万葉集をはじめ20万首近くの和歌を覚えさせ、ディープラーニング（深層学習）を用いてAIの創作力を磨いた。中国は国家戦略としてAIを重視している。

「明けてゆく、峰の木の葉の



中国西安交通大学の金中教授（5月、北京

日本の歌人「八代集並みの出来」

梢より 遥かに続く さ杜鹿の
声
「み吉野の 山ほととぎす
き夜の 山の都の 春を待つかな」

いくつかのキーワードを入力するとAIが蓄積したデータから適切な言葉を運び、こうした和歌を自動で作る。

作品を鑑賞した歌人・作家の小佐野弾さん（台北在住）は「和歌として文法や語彙も比較的自然だ」と指摘。「日本の短歌AIよりも良い出来栄だ。古典和歌は現代短歌に比べ読み方や言葉の意味が類型化しているからAIには作りやすいのかもしれない」と分析した。

金氏は1995年に東京外語大に留学、和歌や漢詩の研究で計11年、日本に滞在した。現在は西安交通大学で日本文学を教えている。「AIには人間に思いつかない発想があるし、人間ならではの文学性がどこにあるのかという根源的な問題を考えるきっかけになる」と話し、新プログラムの活用を期待している。

『東奥日報』2021年6月12日朝刊

参考文献

中国西安交通大学における AI 和歌創作の研究
——村尾誠一先生のご指導と関連して

（金中、『樹間爽風』創刊号、2021.12）

WakaVT: a sequential variational transformer model for Waka generation

（Y. Takeishi, M. Niu, J. Luo, Z. Jin, X. Yang, *Neural Processing Letters* 54 巻第 2 期, 2022. 4）

和歌 AI で中日詩歌交流を促進

（金中、『人民中国』2022 年 6 月号、2022. 6）



霜の音
AI 和歌百首

和歌：中太郎
編集：金中
題字：周兪林
表紙デザイン：譚景之

葛飾吟社

葛飾吟社機関誌『梨雲』2022年10月号 No.180
日中国交正常化50周年特集 別冊
2022年10月1日 第1版発行

ISSN 2185-8233